

平成 29 年 3 月 24 日

平成 28 年度東洋学研究情報センター機関推進プロジェクト実施報告書

1. プロジェクト名

富山妙子画伯コレクション—第三世界と Narrative Art

2. 申請研究者

真鍋 祐子 東京大学東洋文化研究所・教授

共同研究者

Rebecca Jennison 京都精華大学・教授

小林宏道 多摩美術大学美術館・学芸員、事務課長

稲葉（藤村）真以 光云大学校・助教授

3. 研究期間

平成 26 年 4 月 1 日から平成 33 年 3 月 31 日（7 年間）

4. プロジェクトの趣旨、全体計画（400 字程度）

申請者は画家・富山妙子氏より所蔵する資料・書籍の寄贈を受け、その整理と一般公開のためのデータベース構築を進めて日・英語の WEB サイトを開設し、最終的にはノースウェスタン大学歴史学部の Laura Hein 教授（日本近現代史）が主宰する”*Imagination without Borders*” (<http://sites.northwestern.edu/iwb/>) と相互にリンクさせることを目的として、本プロジェクトを申請するものである。

炭坑・韓国民民主化闘争・慰安婦等を題材とした作品群が、主に 70 年代以降、トランスナショナルなネットワーク（キリスト教、アムネスティ等）を通じて欧米経由で国際的な人権運動に与し、非合法的に東南アジアやアフリカ諸国に流出したことで当該国の民主化を促す等の narrative art の役割をはたした点に焦点をあてる。氏の作品がコレクションされた各国の装丁本、冊子、ポスター、チラシの他、インタビュー記事、作品の伝播に伴い生じた各国知識人との交流に関わる手紙等の一次資料、取材旅行で撮影された写真等（60 年代の中南米、オリエントを含む）の民族誌資料、制作のベースをなす文献等を取り扱うことで、第三世界におけるアートを通じた民主化プロセスを解明する。

5. 今年度の研究実施状況（400 字程度）

富山氏の制作活動は 50 年代の鉱山・炭坑に始まり、60 年代に炭坑移民を追って中南米に取材、西洋近代美術へのカウンターカルチャーとしての narrative art に出会って後、オリエント（西アジア、中央アジア、南アジア）にも取材した。70～80 年代には韓国民民主化運動を題材とした一連の作品で社会参与し、80 年代以降は朝鮮人強制連行、じゃばゆきさ

ん、慰安婦、満洲をテーマとした。平成 28 年度までにこれら全資料の殆どを受贈し、資料整理をほぼ終えることができた。デジタル化、データベース化、及びラベル貼りの作業は次年度以降の課題である。

ただし、断片的に残された資料やカテゴリー化の難しい資料がまだいくらか残存しており、これらについては一旦受け入れたうえで、次年度に分類作業を持ち越すことにした。

6. 今年度の研究成果の概要（400 字程度）

富山資料を活用した研究プロジェクトを企画し、円滑に進めるために、今年度は外部資金の獲得を目標として、作品論、作家論、社会運動史の観点から 3 名の共同研究者を加えた。富山資料を扱う際の理論的検討は、当プロジェクトがめざすデータベース構築においても不可欠であり、さまざまな意見交換を行ってきた。

その成果として、「炭坑」を媒介とした富山氏の 80 年代の芸術活動に焦点をあてた研究プロジェクト「富山妙子の画家人生と作品世界—ポストコロニアリズムの観点から」が JFE21 世紀財団・アジア歴史研究助成（平成 29 年 1 月～12 月）に採択され、筑豊、韓国、ドイツ・ルール地方での現地調査を通じた富山資料の裏付け作業を行なうことが可能となった。